

大村西崖著『密教發達志』訳注研究（六）

元山 公寿

《抄録》

本研究は、大村西崖が漢文で著した『密教發達志』の訳注研究の続編で、第一章の第 39 節から第 45 節までを国訳し、注記をほどこしたものである。ここで取り上げられている經典は、前秦・後秦・西秦の、いわゆる三秦時代、およそ 4 世紀後半から 5 世紀初頭に、僧渉・竺仏念・鳩摩羅什・弗若多羅・仏陀耶舎・聖堅といった六人の訳経僧によって翻訳された經典、およびその時代の失訳となっている經典である。大村は、それらの經典に見られる、呪や陀羅尼、あるいは毘盧舎那などといった、後のいわゆる純密と関わる要素について検討して、翻訳の時代が下るにつれて、密教的な要素が顕著になっていることを明かしている。

はじめに

本研究は、大村西崖（1868～1927）によって漢文で著された『密教發達志』を国訳するとともに、現代の研究成果を参考にしながら、詳細な脚注を加えることを目的としている。本論文は、昨年までに発表したものの続編¹で、第一章の「教の興りより隋に至るまで」の第 39 節「苻秦僧渉の請雨の呪術」（底本の 90 頁）より、第 45 節「三秦の失訳経」（底本の 100 頁）までである。

以下に、訳注に当たっての凡例を示す。

凡例

- 一、大村西崖著『密教發達志』（国書刊行会、1972 覆刻）を底本とした。
- 二、旧漢字は、当用漢字に改めた。
- 三、書き下すに当たって、可能な限り、大村の返り点にしたがひ、適宜、段落分けをした。
- 四、大村による割り注は <> で示した。
- 五、經典名や著作名には『』を、引用文には「」を附した。

六、人名には、可能な限り [] によって生没年、国王の場合は在位を補い、インド名が附されていない場合には、そのインド名を補った。

七、地名に関しても、可能な限り [] によってインド名、及び現在の地名を補った。

八、年号に関しても、[] によって西暦年を補った。

密教発達志卷一

日本 大村西崖撰

一、教の興りより隋に至るまで

39、苻秦の僧渉の請雨の呪術

苻秦 [351 ~ 394] の沙門僧渉 [? ~ 380]、西域の人なり。少くして出家し、虚静にして気を服し、五穀を食さず。日に能く五百里を行き、未然の事を言い、驗、掌を指すが若し。建元十一年 [375] を以て、長安に至り、能く秘呪を以て、神龍を下す。早ごとに、苻堅 [357 ~ 385]、之をして、龍を呪し、雨を請わしむ。俄かにして、龍、鉢の中に下り、天、輒ち大雨す。堅、及び群臣、親ら、鉢に就きて、之を觀る。十六年 [380] 十二月、疾なくして化す。翌年、正月より雨らず。六月に至り、堅、嘆じて曰く、「渉公、此に在らば、豈に、之を憂えんや」と <『晋書』九十五²、『高僧伝』十³>。

是の時、請雨法、蓋し、已にあり。

40、竺仏念の訳経

竺仏念 [~ 384 ~]、涼州 [甘肅省] の人なり。弱年にして出家し、衆経を諷習し、粗ぼ外典に渉る。家世、西河に居し、方語を洞曉し、華戎の音義、兼釈せざることなし。苻秦の建元中 [365 ~ 385] に、曇摩持 [~ 379 ~]・鳩摩羅仏提 [Kumārabuddhi, ~ 382 ~]・僧迦跋澄 [Saṅghabhūti, ~ 383 ~]・提婆難提⁴ 等あり。来りて、長安に入り、將に衆経を出さんとす。當時の名徳、伝訳に能うことなく、衆、咸く、念を推し、以て、明匠とす。世高 [~ 160 ~]・支謙 [ca.195 ~ ca.254] 以後、念を踰ゆることあらず。苻・姚 [384 ~ 417] 二代に在りて、訳人の宗と為る。後に疾に遭いて、常安 [長安、現在の西安] に卒る <『高僧伝』一⁵、『開元録』四⁶>。

訳す所の『最勝問菩薩十住除垢断結経』 <十卷、方等、苻堅の代の訳>の中に、

無畏魔王、及び梵・釈・四王、持経者を擁護する為に説く所の短呪七首を出す⁷<卷九>。

①金剛藏

『菩薩処胎経』<七卷、涅槃>の中に、釈尊、及び増長・広目・持国の三天王、行法の善人、及び真実の法師を擁護する為に説く所の呪四首を出し⁸<卷三>、又、八藏を説く⁹<卷七>。胎化・中陰・摩訶衍方等・戒律・十住菩薩・雑・金剛・仏藏、是なり。其れ、金剛藏は、蓋し明呪藏を謂う。想うに、『大陀羅尼神呪経』¹⁰等の如く、乃ち、特、其の一分なるのみ。

41、姚秦の鳩摩羅什の法術、及び訳経

姚秦[384～417]の鳩摩羅什<童寿>[Kumārajīva, 344～413]、天竺の人なり。家世、国相なり。父の鳩摩羅炎[Kumārāyana]、相位を嗣ぐを辞して、出家し、東して、葱嶺[Pamir]を度る。龜茲[庫車]王、郊迎して、請いて国師とし、妹を以て、之に妻わす。既んじて什を生ず。什、七歳にして出家す。九歳にして、母に随い、辛頭河[Indus]を渡りて、罽賓[Kaśmīra, Kashmir]に至る。槃頭達多<Bandhudatta>に師事し、雑藏、及び阿含を受く。罽賓王、其の神俊を聞き、上供を給う。十二歳にして、母と龜茲に還る。諸国、重聘するも、什、皆、顧みず。次で月氏に至り、又、沙勒[Kashgar, 喀什市]に停まりて、阿毘曇[abhidharma]を誦す。説法の暇に、外道の経書を尋訪し、博く四围陀典[veda]・舎多論・五明論[pañcavidyā]¹¹を覽て、陰陽星算、畢尽せざることなく、妙に吉凶に達し、言、符契の若し。既んじて、莎車国[Yarkand]の須耶利蘇摩¹²に就きて、広く大乘を学び、之に傾く。母に随いて、龜茲の北界の温宿国[烏什, Uchturpan]に到る。一道士あり。名を諸国に振う。什、論議して、之を破す。是に於て、声、葱左に満ち、誉、河外に宣ねし。龜茲王の白純[～384]、躬ら往きて、迎え還る。四遠に宗仰せざるなし。年二十にして、戒を受け、律を誦し、新寺に住止す。建元十八年[382]九月、符堅、將軍呂光[338～399]を遣して、龜茲を伐たしむ。光、什を獲て、還りて、涼州に至る。既んじて、堅、姚萇[384～393]の害する所と為り、光も又、殺さる。萇、卒して、子の興[394～416]、位を襲ぐに及び、弘治三年¹³、呂隆[401～403]を伐ちて、什を迎う。其の年の十二月二十日、常安に到り、待うに、国師の礼を以てす。什、是より、西明閣、及び逍遙園に在

りて、衆経を訳出す。弘治十五年¹⁴四月十三日、卒す。年、七十なり<『出三蔵記集』十四¹⁵、『高僧伝』二¹⁶、『貞元録』六¹⁷>。

先に引く所の『大品般若』¹⁸<二十七卷、弘治元年¹⁹四月十三日に出す>・『大智度論』<百卷、弘治七年²⁰十二月二十七日に出す>、即ち其の訳する所なり。

又、『孔雀王呪経』²¹<一卷>を訳す。然れども、今、伝うる所の本は、其の初分、偽作に似て、又、「阿吒婆拘呪経」<前出の『大陀羅尼神呪経』の中に載す所²²の異本なり>を附加す²³。其の文も亦、未だ完らず。更に末尾に至りて、「孔雀王呪場法」を出す²⁴<尸梨蜜多羅 [Śrīmitra, ? ~ 343?] の訳する所に似たり²⁵>。其れ、猥雑にして支離なり。以て依憑するに足らず。

『弥勒下生経』²⁶・『摩訶般若波羅蜜大明呪経』²⁷<各一卷>も亦、什の訳する所と称して、共に密部に編す²⁸。然りと雖も、前者、毫も密経に入るべきの義なく、後者、即ち『般若心経』の異訳にして、纔に一呪を説くのみ。

其の余の什訳の『善神摩訶神呪経』²⁹<二卷>、佚して存さず。

『大樹緊那羅王所問経』<四卷、方等>、四天王の持経者に対して悪心を懐くものを降伏せんが為に説く所の一呪あり³⁰<卷四>。

①仁王護国法

『仁王般若波羅蜜多経』<一卷>の「護国品」の中に、百仏・百菩薩・百羅漢像、及び百比丘等に請いて、経を講ずることを説く³¹。即ち護国法の濫觴なり。

『妙法蓮華経』<八卷、弘治八年³²夏に出す>の六呪³³、略ぼ『正法華経』³⁴と同じと雖も、不躡の例に依るを以て、異とす。

②梵網の説処、及び蓮華台藏世界

『梵網経』<二卷、大乘律、弘治七年³⁵六月十二日に出す>、初め、釈尊、第四禪魔醯首羅 [Maheśvara] 天王宮に在りて、無量の梵天王 [Brahmā]、及び菩薩衆と与に、蓮華台藏世界の盧舎那 [Vairocana] 仏所説の心地法門を説く。是の時、釈尊、即ち此の世界の大衆を撃接し、還りて蓮華台藏世界に至る。盧舎那仏、正覚を成じて、此の処に在り、為に心地法門を説く。其の台の周遍に千葉あり。一葉に一世界あり。一一の世界に一釈迦あり。一葉の世界に復、各の百億の須弥・日月・四天下あり。南閻浮提の百億の菩薩の釈迦、百億の菩提樹下に坐す。皆、是れ、盧舎那の化身なり³⁶。既にじて、蓮華藏世界より、而も没し、菩提樹下に

還り、更に帝釈天 [Indra] 宮・炎天 [Yāma]・第四天 [Tuṣita]・化樂 [Nirmāṇarati]・他化 [Paranirmitavaśavartin]・一禪・二禪・三禪に至り、又、魔醯首羅天宮に至り、各の説く所あり。又、天王宮より、菩提樹下に至りて、十波羅提木叉 [prātimokṣa]・四十八輕垢罪を説く³⁷。乃ち『華嚴』³⁸の意に依り、以て戒を説くものなり。故に、其の説処の天上に在ること、『華嚴』に同じ。其れ、蓮華台藏世界も亦、酷しく『華嚴』に似たり。惟みるに、『華嚴經』の出る後、大乘戒の權威をして最高ならしめんと欲して、此の經を述作するのみ。

③呪術、犯戒とす。

輕垢罪の中に、呪術も亦、其の一に居く³⁹。乃ち呪術の未だ仏教の正法に容れられざるを見るべし。

④天宮所説の經

夫れ、純密以外の諸經、殆ど、一として釈尊の印度の国土に在りて、之を説くものにあらざることなし。独り、『華嚴』・『梵網』に至りて、始めて天宮に於て法仏の説く所と稱す。蓋し法身の觀、漸く高遠に詣り、遂に説処をして実土を離れしめ、説者をして法仏を仮らしむるを致す。『大日經』の謂う所の金剛法界宮に於て説き⁴⁰、『金剛頂經』の謂う所の色究竟天宮・他化自在天宮等に於て説き⁴¹、並びに毘盧遮那仏を以て、其の教主とす。是れ、豈に範を『華嚴』・『梵網』の二經に取る所あるにあらざることなきを得んや。畢竟、毘盧遮那も亦、盧舍那の向上者に過ぎざるのみ⁴²。『華嚴』・『梵網』の密教に於てすること、夫れ、猶、宗木の匠氏に於てするがごとし。『金剛頂經義訣』、『梵網』を貶し、以て『金剛頂經』の淺略のものとする⁴³。適だ以て、其の本とする所を見るべきのみ。

42、弗若多羅の訳經

弗若多羅 < 功德華 > [Puṇyatara, ~ 404 ~]、罽賓国の人なり。少年にして出家し、備に三蔵に通ず。弘治中⁴⁴に、錫を振いて関に入る。姚興 [393 ~ 416]、待するに上賓の礼を以てす。弘治六年⁴⁵十月十七日より、經を常安に訳す。隋の大業の末に卒す⁴⁶。

出す所の經の中に、『虚空藏菩薩聞持經』・『陀羅尼法門六種動經』・『仏心總持經』等あり < 『貞元録』五⁴⁷>。並びに今に伝えず。『虚空藏經』、蓋し求聞持を説く。

『仏心総持経』、乃ち『生経』⁴⁸と同本異訳なるのみ。

43、仏陀耶舎の呪術、及び訳経

仏陀耶舎<覚名> [Buddhayaśas, ~ 408 ~] も亦、罽賓の人にして、婆羅門の種なり。世、外道に事う。年十三にして出家し、大小乗の経を誦し、五明の諸論を学び、世間の法術、皆、悉く綜習す。年二十七にして受具し、後に沙勒に至る。停まること十余年にして、乃ち東して亀茲に適く。時に鳩摩羅什、姑臧 [甘肅省武威] に在り。耶舎、之を慕いて、亀茲を脱す。薬水を呪し、足を洗い、疾行し、以て、追捕を免れ、遂に姑臧に達す。什、已に常安に入り、耶舎の至るを聞きて、姚興に勧めて、之を迎えしむ。耶舎、是より常安の逍遙園の新省に在りて、経を訳す。弘治十年⁴⁹に起ち、十五年 [413] に訖る。竺仏念、語を度す。『長阿含経』⁵⁰<二十二巻>、弘治十四年⁵¹を以て出す。後に辞して西に還り、罽賓に到りて、『虚空蔵菩薩経』⁵²<一卷、方等、大集部>を得。賈客に寄せ、以て涼州の諸僧に伝与す。遂に終わる所を知らず<『出三蔵記集』十四⁵³、『高僧伝』二⁵⁴、『開元録』四⁵⁵>。

『長阿含経』<巻十二>に、釈尊、諸天の幻偽虚妄の心を降さんが為に説く所の五呪を載す⁵⁶。阿含部中に呪あるは、止だ是のみ。

①求聞持法の萌芽

『虚空蔵経』の中に、釈尊所説の呪三首⁵⁷、虚空蔵菩薩所説の陀羅尼一首⁵⁸あり。釈尊所説の呪、菩薩の名を称え、東に向き⁵⁹、之を誦さば、則ち人をして、憶持不忘の力を得せしむ⁶⁰。殆ど是れ、求聞持法の権輿と為るものの如し。菩薩の説く所の陀羅尼、無尽降伏師子奮迅と名づく⁶¹。之を誦さば、善く諸法の性を知り、無生忍を得と云う⁶²。

44、乞伏秦の聖堅の訳経

乞伏秦 [385 ~ 431] の沙門、聖堅 [~ 400 ~]、或いは法堅と曰う。太初年間 [388 ~ 400]、河南国に在りて、武元王乾帰 [388 ~ 400, 409 ~ 412] の為に、『羅摩伽経』<三巻、華嚴、『出三蔵記集』五⁶³>を訳す。釈尊の説く所の陀羅尼三首<蠡髻梵王頂法身⁶⁴(具相好)、浄調伏除無量阿僧祇劫罪業⁶⁵(除罪)、白宝蓮華⁶⁶(除地獄等苦)>あり。

又、『無崖際総持法門經』〈一卷、方等〉を訳す。一切諸法、皆、総持法門に入ると説くが故に無崖際と云う。之を得れば、能く法性に了達す⁶⁷。

45、三秦の失訳経

三秦の失訳に、『大金色孔雀呪王經』⁶⁸〈二本あり、各一卷〉・『金剛三昧本性清淨不壞不滅經』⁶⁹〈一卷、方等〉あり。

『孔雀經』、雪山の南に金色孔雀王ありて、其の持する所の呪を孔雀呪王と名づくると説く⁷⁰。安穩・心・結界・弥勒・梵天・諸仙〈延寿〉・四天王・諸鬼神〈同上〉の八呪あり⁷¹。一本に、安穩・心・弥勒・梵天・帝釈・諸仙〈延寿〉・四天王・諸鬼神〈延寿、除怨家、退治悪念、退治求便、滅怨悪、滅怨家、吉利〉の十三呪あり⁷²。後者、更に『解説經』下結呪、『呪賊經』及び『法華經』の呪を加う⁷³。

①三昧の諸名、又、密教に類するもの

『本性清淨經』、呪なしと雖も、其の百三昧の名、大空・智印空相・大強勇猛力王・普現色身光明王・蓮華藏・宝印・金剛藏・金剛幢・金剛印・降伏衆魔・陀羅尼印綬・諸仏印文等の如く⁷⁴、頗る密教の思想と近似するものあり。

爾余の方等の諸経も亦、斯に類するもの、少なからず。今、姑く省略に従う。

- 1 拙著「大村西崖著『密教發達志』訳注研究（一）」（『大正大学研究紀要』98, 大正大学, 2013）、「大村西崖著『密教發達志』訳注研究（二）」（『大正大学研究紀要』99, 大正大学, 2014）、「鉄塔相承説をめぐって—大村西崖著『密教發達志』訳注研究（三）—」（小澤憲珠名誉教授頌寿記念論集『大乘仏教と浄土教』, ノンブル社, 2015）、「大村西崖著『密教發達志』訳注研究（四）」（『大正大学研究紀要』100, 大正大学, 2015）、「密教の発生をめぐって—大村西崖著『密教發達志』訳注研究（五）—」（小峰彌彦先生・小山典勇先生古稀記念『転法輪の歩み』（『智山学報』65）, 智山勸学会, 2016）
- 2 『晋書』「列伝」「僧渉」（中華書局, 1974, p.2497）
- 3 慧皎『高僧伝』（T. vol.50, No.2059, p.389b ~ c）
- 4 提婆難提：曇摩難提（Dharmanandi, ~ 384 ~）のことか
- 5 慧皎『高僧伝』（T. vol.50, No.2059, p.329a ~ b）
- 6 智昇『開元釈教録』（T. vol.55, No.2154, p.512a ~ b）
- 7 『最勝問菩薩十住除垢斷結經』（T. vol.10, No.309, pp.1038c ~ 1039a）、無畏魔王（他化自在天?）、梵王（Brahmā）、釈提桓因（Śakrodevānāmindra）、東方天王提鞞賴吒（Dhṛtarāṣṭra）、南方天王毘樓勒伽（Virūdhaka）、西方天王毘樓波叉（Virūpākṣa）、北方天王拘毘羅（Kubera）の諸天が、それぞれ呪を説いている。

- 8 『菩薩從兜術天降神母胎説広普経』(T. vol.12, No.384, pp.1030c ~ 1031a)、世尊、提頭頼吒 (Dhṛtarāṣṭra)、毘樓勒叉 (Virūdhaka)、毘樓搏叉 (Virūpākṣa) が、それぞれ呪を説いている。
- 9 『菩薩從兜術天降神母胎説広普経』「最初出経胎化藏為第一中陰藏第二摩訶衍方等藏第三戒律藏第四十住菩薩藏第五雜藏第六金剛藏第七仏藏第八是為釈迦文仏経法具足矣」(T. vol.12, No.384, p.1058b)
- 10 『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』(T. vol.21, No.1332)
- 11 僧祐『出三蔵記集』(T. vol.55, No.2145, p.100c)、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.811a) では、「四韋陀五明諸論」となっており、慧皎『高僧伝』(T. vol.50, No.2059, p.330c) では「善学毘陀含多論」「博覧四毘陀典及五明諸論」となっているので、舍多論は「毘陀含多論」(vedānta) のことであろう。
- 12 須利耶蘇摩：慧皎『高僧伝』(T. vol.50, No.2059, p.330c) では「兄字須利耶跋陀弟字須利耶蘇摩」となっており、これに基づいたものと思われるが、僧祐『出三蔵記集』(T. vol.55, No.2145, p.100c)、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.811a) では、「須利耶蘇摩」となっており、兄の字から見ても、須利耶蘇摩 (Śūryasoma) の誤りであろう。
- 13 弘治三年 [1490] は明代の年号で年代が合わないが、僧祐『出三蔵記集』(T. vol.55, No.2145, p.101b)、慧皎『高僧伝』(T. vol.50, No.2059, p.332a)、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.811b) では「弘始三年 [401]」となっており、弘始三年の誤り。
- 14 弘治十五年 [1502] は明代の年号で、円照『貞元新定釈教目録』では「弘始十五年 [413]」となっており (T. vol.55, No.2157, p.812b)、弘始十五年の誤り。しかし、僧祐『出三蔵記集』では「晋義熙 (405 ~ 418) 中卒于長安」となっており (T. vol.55, No.2145, p.102a)、慧皎『高僧伝』では「以偽秦弘始十一年 (409) 八月二十日卒于長安是歲晋義熙五年 (409) 也」となっていて (T. vol.50, No.2059, p.333a)、一定していない。
- 15 僧祐『出三蔵記集』(T. vol.55, No.2145, pp.100a ~ 102a)
- 16 慧皎『高僧伝』(T. vol.50, No.2059, pp.330a ~ 333a)
- 17 円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, pp.810b ~ 812b)
- 18 『摩訶般若波羅蜜経』(T. vol.8, No.223)
- 19 弘治元年 [1488] は明代の年号で、円照『貞元新定釈教目録』で「弘治元年癸卯四月十三日出至六年四月二十二日訖」(T. vol.55, No.2157, p.809a) とあることに基づいたものと思われるが、僧祐『出三蔵記集』では「偽秦姚興弘始五年四月二十二日於逍遙園訳出至六年四月二十三日訖」(T. vol.55, No.2145, p.10c) となっており、智昇『開元釈教録』でも「弘始五年癸卯四月二十三日出至六年四月二十三日訖」(T. vol.55, No.2154, p.512b) となっているので、弘始の誤りである。また、羅什が弘始三年に長安に入ったのであれば、弘始元年 [399] は長安に入る前に訳していたことになるので、『貞元録』の正蔵の脚注で「五年」となっているものもあるので、弘始五年 [403] が正しいであろう。しかも、この年月日は、翻譯を始めた年で、終わったのは、「六年」である。
- 20 弘治七年 [1494] も明代の年号で、円照『貞元新定釈教目録』で「弘始四年夏於逍遙園出七年十二月二十七日訖」(T. vol.55, No.2157, p.809c) とあり、智昇『開元釈教録』でも「弘始四年夏於逍遙園出七年十二月二十七日訖」(T. vol.55, No.2154, p.513a)

となっているので、「弘始七年 [405]」の誤り。

- 21 『孔雀王呪経』（T. vol.19, No.988）
- 22 『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』『仏説曠野鬼神阿吒婆拘呪経』（T. vol.21, No.1332, pp.543c ~ 544b）
- 23 『孔雀王呪経』『仏説曠野鬼神阿吒婆拘呪経』（T. vol.19, No.988, p.484a ~ c）
- 24 『孔雀王呪経』『孔雀王呪場』（T. vol.19, No.988, p.484c）
- 25 僧祐『出三蔵記集』では「西域高座沙門尸梨蜜所出」として「大孔雀王神呪一卷」と「孔雀王雜神呪一卷」が挙げられ（T. vol.55, No.2145, p.10a）、智昇『開元釈教録』でも帛尸梨蜜多羅訳として挙げられている（T. vol.55, No.2154, p.503a）が、現存していない。ただ、僧伽婆羅（Saṅghapāla, 460 ~ 524）訳の『孔雀王呪経』の末尾に「帛尸梨蜜前出」として、「結呪界法」を載せている（T. vol.19, No.984, pp.458c ~ 459a）。
- 26 『仏説弥勒下生成仏経』（T. vol.14, No.454）
- 27 『摩訶般若波羅蜜大明呪経』（T. vol.8, No.250）
- 28 正蔵では、『仏説弥勒下生成仏経』は経集部に、『摩訶般若波羅蜜大明呪経』は般若部に、それぞれ収められているが、大村が参考にしたと思われる『大日本校訂縮刷大蔵経』では、どちらも秘密部に収められている（『昭和法宝総目録』, vol.2, p.460b）
- 29 『善神摩訶神呪経』の名は、僧祐『出三蔵記集』にはみあたらず、智昇『開元釈教録』（T. vol.55, No.2154, p.634b）、円照『貞元新定釈教目録』（T. vol.55, No.2157, p.968c）ともに、「善信摩訶神呪経」となっている。
- 30 『大樹緊那羅王所問経』（T. vol.15, No.625, p.388b）
- 31 『仏説仁王般若波羅蜜経』（T. vol.8, No.245, p.830a）
- 32 弘治八年 [1495] は明代の年号で、僧祐『出三蔵記集』では「弘治八年夏」となっており（T. vol.55, No.2145, p.10c）、円照『貞元新定釈教目録』（T. vol.55, No.2157, p.809b）も智昇『開元釈教録』（T. vol.55, No.2154, p.512b）も同様なので、「弘治八年 [406]」の誤り
- 33 『妙法蓮華経』の「陀羅尼品」に五呪（T. vol.9, No.262, pp.58b ~ 59b）と、「普賢菩薩勸発品」に一呪（T. vol.9, No.262, p.61b）が説かれる。
- 34 『正法華経』の「総持品」に五呪（T. vol.9, No.263, p.130a ~ b）と、「樂普賢品」に一呪（T. vol.9, No.263, p.133b）が説かれているが、訳されている
- 35 弘治七年 [1494] は明代の年号で、円照『貞元新定釈教目録』（T. vol.55, No.2157, p.809c）では「弘治七年六月十二日」となっているので、弘治七年 [405] の誤り。ただ、僧祐『出三蔵記集』にはなく、智昇『開元釈教録』（T. vol.55, No.2154, p.512c）では「弘治八年」となっており、一定していない
- 36 『梵網経』（T. vol.24, No.1484, p.997b ~ c）
- 37 『梵網経』（T. vol.24, No.1484, pp.1003b ~ 1004a）
- 38 『大方広仏華嚴経』（T. vol.9, No.278）
- 39 『梵網経』『呪術工巧調鷹方法<中略>若故作者犯輕垢罪』（T. vol.24, No.1484, p.1007a）
- 40 『大毘盧遮那成仏神変加持経』『一時薄伽梵住如来加持広大金剛法界宮』（T. vol.18, No.848, p.1a）
- 41 『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王経』『一時婆伽梵<中略>住阿迦尼吒天王宮中大摩尼殿』（T. vol.18, No.865, p.207a）、『大樂金剛不空真實三摩耶経』『大毘盧遮

那如来在於欲界他化自在天王宮中」(T. vol.8, No.243, p.784a)

- 42 大村は『華嚴經』や『梵網經』の盧舎那を Rocana と考えていたのであろうか
- 43 『金剛頂經大瑜伽祕心地法門義訣』「此地梵網經兩卷從此經中出淺略之行相也」(T. vol.39, No.1798, p.808a)
- 44 弘治 [1488 ~ 1505] は明代の年号で、僧祐『出三藏記集』(T. vol.55, No.2145, p.20a)でも、智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, p.516a)でも、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.813a)でも「弘始」としているのが、弘始 [399 ~ 416] の誤り
- 45 弘治六年 [1493] も明代の年号で、智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, p.516a)でも、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.813a)でも「弘始六年」としているのが、弘始六年 [404] の誤り。
- 46 「大業 [605 ~ 618]」を、大村は隋の年号とみているが、弘始六年 [404] に誤し始めたとするれば、200 年以上も後に逝去したことになる。智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, p.516a ~ b)も円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.813a)も「衆以大業未卒而匠人殞往悲恨之深有踰常痛」となっており、「衆、大業の未だ卒らずして、匠人、殞往するを以て、悲恨の深きこと、常の痛みを踰うることあり」と読むべきで、大業は年号ではない。ただ、『開元録』では「衆以大業未卒」という異説も示しているのが、大村は、これによって「衆、大業の末を以て卒して」と読んだのであろう
- 47 円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.812c)、正蔵では「卷五」ではなく、「卷六」
- 48 『生経』(T. vol.3, No.154)、円照『貞元新定釈教目録』「仏心等三経並出生経」(T. vol.55, No.2157, p.812c)
- 49 弘治十年 [1497] は明代の年号で、智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, p.517a)でも、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.814a)でも「弘始十年」としているのが、弘始十年 [408] の誤り
- 50 『長阿含経』(T. vol.1, No.1)
- 51 弘治十四年 [1501] は明代の年号で、智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, p.516b)でも、円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, p.813b)でも「弘始十四年」としているのが、弘始十四年 [412] の誤り。
- 52 『虚空蔵菩薩経』(T. vol.13, No.405)
- 53 僧祐『出三藏記集』(T. vol.55, No.2145, p.102a ~ c)
- 54 慧皎『高僧伝』(T. vol.50, No.2059, pp.333c ~ 334b)
- 55 智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, pp.516b ~ 517b)
- 56 『長阿含経』(T. vol.1, No.1, pp.80a ~ 81b)
- 57 『虚空蔵菩薩経』(T. vol.13, No.405, pp.654c ~ 655a)
- 58 『虚空蔵菩薩経』(T. vol.13, No.405, p.656a)
- 59 『虚空蔵菩薩経』「向於東方至心合掌称虚空蔵菩薩名」(T. vol.13, No.405, p.654c)
- 60 『虚空蔵菩薩経』「是虚空蔵菩薩摩訶薩即令彼人得於憶持不忘之力」(T. vol.13, No.405, p.655a)
- 61 『虚空蔵菩薩経』「汝今説此無尽降伏師子奮迅陀羅尼」(T. vol.13, No.405, p.656a)
- 62 『虚空蔵菩薩経』「菩薩若知此者是名善知諸法之性得無生忍」(T. vol.13, No.405, p.656a)、これは、陀羅尼の功德ではなく、一切諸法が空寂であることなどを知ること、得られるものであり、陀羅尼の功德としては、臨終の後に煩惱障や業障を

焼いて、清浄な仏国に往生させることなどが説かれている

- 63 僧祐『出三藏記集』巻五には「聖堅」の名は見えないが、巻二に『虚空藏経』の訳者として「聖堅」の名がある（T. vol.55, No.2145, p.11b, p.13c, p.14c）。また、『羅摩伽経』と『無崖際総持法門経』の名は、巻四の「新集続撰失訳雜経録第一」の中に（T. vol.55, No.2145, p.21c, p.29c）見られ、「聖堅」の訳出とはされていない。なお、後者は『無崖際持法門経』となっている。しかし、智昇『開元釈教録』では、どちらも「聖堅」の訳出として扱われており（T. vol.55, No.2154, pp.517c ~ 518a）、円照『貞元新定釈教目録』も同様である（T. vol.55, No.2157, pp.814c ~ 815a）
- 64 『仏説羅摩伽経』（T. vol.10, No.294, p.863a ~ b）
- 65 『仏説羅摩伽経』（T. vol.10, No.294, pp.864c ~ 865a）
- 66 『仏説羅摩伽経』（T. vol.10, No.294, p.875c）
- 67 『仏説無崖際総持法門経』「得総持者所謂得無崖際因斯総持得無崖際微妙之辯普持一切諸仏所得得無崖際総持之門普持法界悉知入処究竟了達微妙法性」（T. vol.21, No.1342, p.840a）
- 68 『大金色孔雀王呪経』（T. vol.19, No.986）、『仏説大金色孔雀王呪経』（T. vol.19, No.987）
- 69 『仏説金剛三昧本性清浄不壊不滅経』（T. vol.15, No.644）
- 70 『大金色孔雀王呪経』「往昔於雪山王南。有一金色孔雀王仏住其中彼此大孔雀王呪経」（T. vol.19, No.986, p.477c）、『仏説大金色孔雀王呪経』には見られず。
- 71 『大金色孔雀王呪経』であろうが、そこで説かれているものは「安穩」「心」（p.477c）「結界」「弥勒」「梵天」「帝釈」「三十三天」（p.478a）「諸仙」（p.478b）「四天王及諸大鬼神王」（p.478b ~ c）「除怨家」「治悪念」「治求便」「滅怨悪二呪」（p.478c）の14呪となっている。
- 72 『仏説大金色孔雀王呪経』では、「安穩二呪」（p.479c）「心」「弥勒」「梵天」（p.480a）「帝釈」「三十三天」（p.480b）「諸仙」「四天王及諸大鬼神王の延寿」「除怨家」「治悪念」「治求便」「滅怨悪」「滅怨家」（p.480c）「吉利」（p.481a）の15呪が説かれている
- 73 『仏説大金色孔雀王呪経』では、15呪に続いて、「解説経下結呪語」「仏説呪賊経」「法華神呪経」として呪を出している（p.481a ~ b）ほか、「勇施所説呪」「毘沙門天王所説呪」「持国天王所説呪」「羅刹女所説呪」「大涅槃経呪第六天魔王波旬所説呪」を挙げている（p.481b ~ c）
- 74 『仏説金剛三昧本性清浄不壊不滅経』（T. vol.15, No.644, pp.697c ~ 698b）、ただし、「降伏衆魔」は、「滅衆相降伏衆魔」となっている（p.698a）。

キーワード：僧渉・竺仏念・鳩摩羅什・弗若多羅・仏陀耶舎・聖堅